

部類	國
部冊	1
番號	12

尋常
小學

國語讀本

卷十

文部省

K130.8
3
10

部類	小
番號	八七五



尋常
小學
國語讀本
卷十

文
部
省

國立
中央
圖書館
藏

大正十年十月廿四日購入



目 ろ く

第一	明治神宮參拜	一	第十五	輸出入	八十五
第二	アレクサンドル大王と醫師フリプ	七	第十六	登校の道	八十九
第三	道ぶしん	十一	第十七	言ひにくい言葉	九十一
第四	馬市見物	十六	第十八	文天祥	九十六
第五	燈臺守の娘	二十四	第十九	温室の中	百
第六	霧	二十九	第二十	手紙	百六
第七	パナマ運河	三十	第二十一	日光山	百十
第八	開墾	三十七	第二十二	捕鯨船	百十二
第九	陶工柿右衛門	四十四	第二十三	太宰府まうて	百十六
第十	銀行	五十	第二十四	たしかな保證	百二十一
第十一	傳書鳩	五十三	第二十五	平和なる村	百二十四
第十二	鉢の木	五十九	第二十六	進水式	百二十七
第十三	京城の友から	七十二	第二十七	兒島高德	百三十
第十四	炭坑	七十九			

留 達

第一 明治神宮參拜

十月十二日、我等五年生一同は、河井先生にみちびかれて、東京代々木の明治神宮に參拜せり。
 青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き參道を
 行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。橋を渡
 り、大鳥居をくぐりて南參道に入る。兩がはに木立
 すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれ
 ず。左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第
 三の鳥居の前に出づ。水屋の水に手を清め口をす
 すぎて南神門を入れば、拜殿・廻廊など總べて白木

神 奉 后



造にて、神々しきたとへん
 方なし。拜殿の前に進みて
 整列し、謹みて拜し奉る。明
 治天皇昭憲皇太后、御二方
 のおほみたま、とこしへに
 此所にしづまりまします
 よと思へば、かしこさ殊に
 身にしみておぼゆ。
 先生の説明によれば、當社
 の用材は主として木曾産

好 遺 到 舊 世 何

の檜なりとぞ。又日々に奉る供へ物には、御生前殊
 に御好みありし品々を選ぶ由なるが、それらの品
 を社務所にたづさへ來て、神前にさゝげたしと願
 ひ出づる者數多しといふ。

寶物殿に到りて御遺物を拜觀す。平生きはめて御
 質素にわたらせられし御有様、一つくの御品の
 上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。

それより社務所に行き、舊御殿舊御苑の拜觀を願
 ふ。何れも、御在世中しばらく行幸行啓ありし所
 にて、當時の御殿御庭などの、今も其のまゝに保存せ

彼所

思

らるゝなりとぞ。案内の人にみちびかれて、まづ社務所の隣なる舊御殿を拜觀す。御殿は質素なる平屋にて、御庭の此所彼所に、下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。はぎの御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。此所を出でて舊御苑に入り、木立の間の細道をたどれば、程なく小さき建物の前に出づ。名を隔雲亭かくうんていといふ由なり。前には横長き池をひかへ、池のめぐりは見渡す限りの木立くさむらにて、さながら別天地に遊ぶ思あり。昔の武藏野むさしの姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も

坪

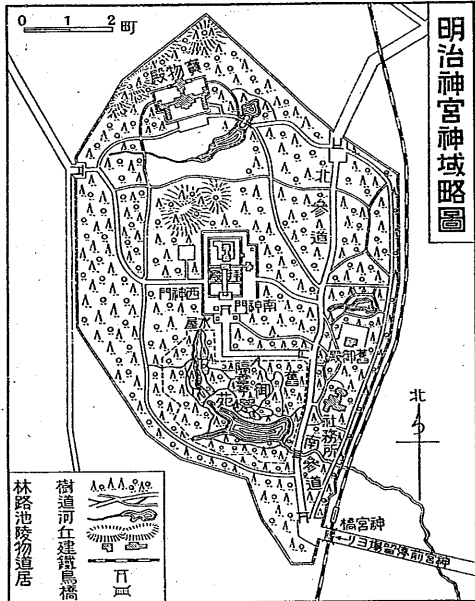
新

人工を加へずといふ。

舊御苑を出でて北參道より歸る。途中、先生は

「此の境内は廣さ約二十二萬坪。舊御苑と舊御殿の邊とをのぞきては、立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。大

明治神宮神域略圖



盡(尽)

方は國民の眞心こめたる獻木^{けん}にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。種類は大てい我が國に産する限りを盡くし、産地は日本全國にわたれり。臺灣^{からふと}樺太^{からふと}など、遠方より送り來れるもあれば、枯損するもの多かるべきに、ほとんど皆勢よく根づきたるは、誠に驚くべき事ならずや。ひつきやう掘取る者、運ぶ者、植込む者、一樣に心を盡くして、大切に取扱ひたるによるならん。又御造營の半ば頃より、各地方青年團の御手つだいを願ひ出づる者數多かりしかば、何れも十

團半|扱

建|征|位
設

日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の人夫にもまさりて仕事ははか取りたりと聞く。これも眞心の致す所なるべし。と語られたり。

第二 アレクサンドル大王と醫師フリップ
昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。マケドニヤといふ小さな國の王子と生れ、二十一年で位につき、わづか十數年の間に四方の國々を征服して、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

冷

其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。或日王は部下の精兵を引連れ、焼けつくやうに熱い平原を横ぎつて、タルススといふ町に着いた。全身砂ぼこりにまみれた王は、町はづれを流れてゐるきれいな川にはいつて水浴をした。水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出来ない。ようだいは時々刻々に惡くなつて行く。醫

經殺投

密頼調

師は皆、投藥してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、たゞ經過を見守つてゐるばかりである。

此の有様を見て、フリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。方法は或劇藥げきを用ひる外になかつたので、フリップは眞心こめて此の事を申し出た。王はこゝろよく之を許した。フリップが藥を調合しに別室へ退いた後へ、王の日頃信賴してゐるパルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。それにはフリップが敵から大金をも

終

然
興奮
眼

らふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、用心するやうにと書いてあつた。王は讀終つて、そつと手紙をまぐらの下へ入れた。程なくフリッパは病室にはいつて來て、うやくしく藥のコップを王にさゝげた。王は片手にそれを受取り、片手にかの密書を取り出して、靜かにフリッパに渡した。

一口又一口、平然と藥を飲む王、一行又一行、おそれと興奮に眼かゞやくフリッパ。

やがて讀終つたフリッパが、眞青な顔をして王を見

面

上げると、王は信賴の情を面にあらはして、フリッパを見下してゐた。

王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出來た。

第三 道ぶしん

十月二十五日は、青年團の道ぶしんの日であつた。團員は、午前七時八幡神社の境内に集つた。總員三十二人が四組に分れて、それぐ仕事の特場に向つた。

午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。

育

熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、此の頃墓参りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

「やあ、皆さん御苦勞ですね。今通つて見て來ましたが、大そうりっぱになりました。よくこんなに早く出來ましたね。どれ、私もお茶を一つ御ちそうになりませう。」

誰かが力石をころがして來て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。高橋さんは、すぐ前に居る

國十

順太郎君を見て、

「あなたもずるぶん大きくなりましたね。おとうさんの若い時そつくりです。私も、あなたのおとうさんなどと一しよに、よく道ぶしんに出たものでした。」

高橋さんは、お茶を一口飲んで、

「郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。私どもの若い時分には、かういふ仕事になると、あなた方の半分ぐらゐしか働きませんでした。朝のかゝりはお

そいし、晩のしまひは早い上に、とかく無責任な事ばかりしてゐました。そんな風でしたから、ぼんの道ぶしんなどは、何時も二日はかゝつたものでした。皆さんの前に立つと、其の頃の心掛が恥づかしくてなりません。

私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のとゝのつてゐるのに驚いて、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。しかし、此の間夜學を參觀した時の皆さんの熱心な様子や、今日の働を見て、

大そう心強くなりました。私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

朝鮮の青年も、近頃はなかく頭が進んで來ましたので、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。それにつけても、諸君にも大いに奮發していただきたいのです。

高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。やがて暮近くなつたので、一同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕日を浴

歌

びて歸途についた。

第四 馬市見物

宮本の伯父様の所に着いたのは昨夜七時でした。久々で皆様といろくお話をして、非常に愉快でした。ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

だんく市場に近づくと、本通も横町も皆馬でいっぱいです。なれない私は、大丈

久 市

危険 向

無 周圍

夫といはれても、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、土地の人は一向平氣で、三四歳の子供でも、腹の下などを自由にくづつて歩きます。馬も誠に從順で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。市場は町はづれにあります。廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。私が行つた時には、もう其所にすき間も無く

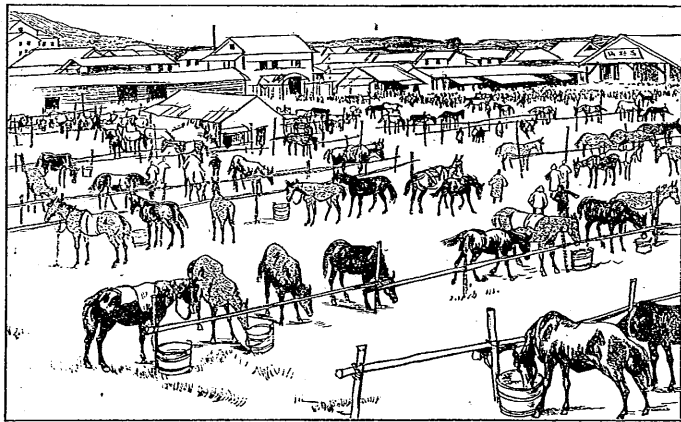
族



子馬がつないであります。皆二歳駒だ
さうです。まだせりが始るのに間がある
といふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、
どの子馬も皆かはいらしい顔をして、お
となしくつながれてゐます。中には、母馬
がつきそつて來てゐるのもたくさんに
あります。

子馬には大てい
飼主の一家族が
ついて來て、親切

背



に世話をしてゐ
ます。中には、君ぐ
らゐの子供や、其
のおかあさんら
しい人が、今日の
別れを惜しんで、
泣きながら豆や
にんじんをやつ
たり、くびや背を
なでたりしてゐ

直

るのもあります。それを見ると、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も従順で人になつくわけだと、しみぐ思ひました。

せりの始つたのは十時頃でした。せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。子馬が一頭づつ中央の廣場に引出されると、黒山のやうに集つてゐる買手は、自分の見込で思ひくの直をつけて、次第にせり上げる。其の間、買手の競

争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常にぎやかです。さうして、もうこれが最高、の直だと見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、取引が成立ちます。

取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。二年の年月苦勞して育てて來たものが、急に見ず知らずの人の手に渡つてしまふのだから、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつとも

買段圖

な事です。

此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、直段も一頭四千圓五千圓といふ高いのがあるさうです。これ等の馬が日本全國に散らばつて、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。私は今日此所に來て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにや

處処

さしく扱つてくれ、ばよいと、心からいのりました。歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、賣つてゐる菓子もおもちやも、多くは馬にちなんだ物で、店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。別封の繪葉書も歸りに買つたのです。市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。

十一月二日

兄から

信吉どの

第五 燈臺守の娘

英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。其の一角にそびえてゐる燈臺に、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。波風の外には友とするものもない此の島で、老夫婦のなぐさめとなるものは、氣だてのやさしい一人娘のグレース、ダーリングであつた。或秋の夜の事である。一その船が、俄の嵐におそ

嵐

許附 救

はれて、此の島に近い岩に乗上げた。船は二つにくだけて、船尾の方は見るく大波にさらはれてしまつた。岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、何のかひもなかつた。

夜がほのぐと明けた頃、荒れくるふ海上を見渡したグレース親子は、ふとはるか沖合に、かの難破船を見とめた。娘は驚いて、

「まあ、かはいさうに。おとうさん、早く助けに行きませう。早くく。」

遂

「あの波を御らん。かはいさうだが、とても人間業では救へない。」

「私は、とても人の死ぬのをじつと見ては居られません。さあ、行きませう。命を捨ててかゝつたら、救へないことはありませんまい。」

此のけなげな言葉は遂に父を動かした。二人は早速ボートを出す支度に取りかゝつた。

やがてボートは岸をはなれた。打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げ、ゆり下げられながら、沖へくつき進む。親子は死力を

附漕

退 吞

盡くして漕ぎに漕いだ。岩の附近は波がいよく荒れくるふ。打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。一進一退、たゞ運を天にまかせて、二人はボートをあやつつた。

からうじてボートはかの難破船にたどり着いた。生残つた船員は涙を流して喜んだ。親子は



注

非常な危険ををかし、人々をボートに收容し、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我もくくと力をそへる。かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。

浪

再
名残

二日たつて、天氣も晴れ、波浪もをさまつた。グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、親子にあつく再生の恩を謝し、名残を惜しんで此の島を去つた。

爲
畫
(画)

今まで人にも知られなかつた燈臺守の娘グレース、ダーリングの名は、程なく國の内外に傳はつた。娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。

第六 霧

しらぐと、朝霧 野山をこめて、

月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。

野路を行く人影 たゞちにきえて、

けたましまし、もずの音、こずゑはいづこ。

谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、

輪
路
影

しらぐと、おぼろに 朝霧流る。

しめやかに、夜の霧 ちまたをつゝみ、
立並ぶ家々、ともしびうるむ。

影のごと、人去り 人來る大路、

ほろくくと聞ゆる 笛の音いづこ。

窓ぎはにはひ寄り、ガラス戸ぬらし、

しめやかに、ひそかに 夜の霧流る。

第七 パナマ運河

北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地

寄 笛

形

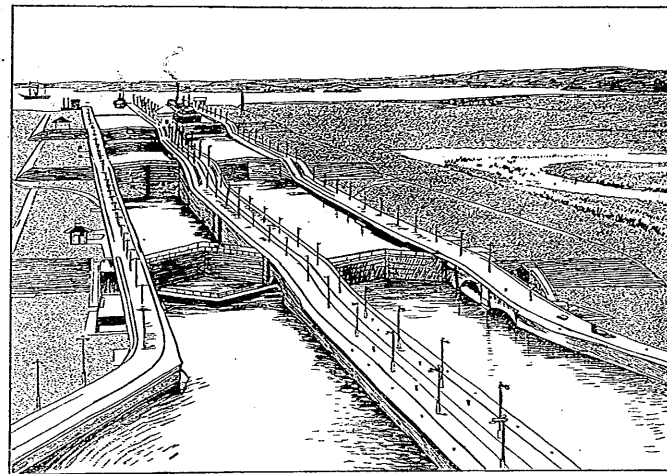
伏 層 岩 割 到

峽といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。此の地峽に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。

パナマ地峽は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろいろの理由があるので、此の地峽を切通し、平かな掘割を造つて、太平大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。

先づ地峽の山地を流れてゐる河の水をせき止め

結



て、湖を二つ造つた。高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水は海面よりずつと高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込む

設

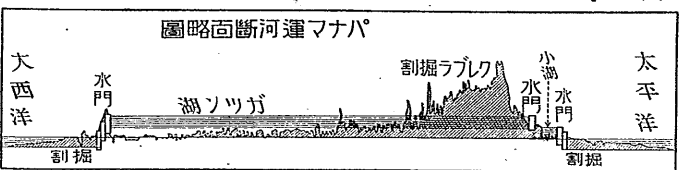
で、とても船を通すことは出来ないから、掘割の處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。

今太平洋の方から此の運河を通るとする。船は先づ海から廣い掘割にはいる。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。近づくると、門の戸びらは左右に開いて、船が中にはいり、戸びらはしまる。上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、上手の水門が開い

湖



て、船は次の箱の中へはいり。前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。



此處

浦

凡

を通る。これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。掘割を通過して船は又湖に出る。ガソン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。此の湖を渡つて又水門を通過する。今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。此處から又掘割を走つて、終に洋々たる大西洋に出るのである。運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航すること

が出来る。

パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしばく計畫したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、十年の歲月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。

米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。衛生の設備

畫 億 費 應

文

をよくして、危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。昔、太平大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

第八 開墾

村はづれにある、うちの雑木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。父は毎日、兄や木びきの力藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。今日は私もついて行つて見た。

かり取つた雑木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。私は思はず、

「やあ、すつかり變つた。」

と聲をあげると、兄は

「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」

といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。地面は霜で眞白である。あたりは如何にも靜かで、たまに散る落葉の音が、かさりくと聞える。兄はそこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを拾ひ集めて來て、たき火を始めた。父は腰から鎌をぬきながら、

「あゝ、今朝はなか／＼寒い。指の先がしびれるやうだ。」

といつて、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をとぎにかゝつた。力藏さんも、

「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」

と誰に言ふともなく言つて、昨日からひきかけてゐるけやきの大木を、大のこぎりでひき始めた。父は

「力藏さん、まあ、一服やつてから始めなさい。」

といったが、力藏さんは見向きもせず、に、元氣な聲で、

「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」

と答へて、止めようもしない。ずいこくといふ

何處

のこぎりの音が、あたりの静かさを破る。

向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。やがて父は、鎌を手にして、雑木のやぶへはいつて行つた。兄は私に

「壯吉、お前はおうさんのかつた雑木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」

といひながら、生木の枝で雑木を束ねて見せた。さうして兄は腰の手ぬぐひを取つて鉢まきにし、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し

始めた。私は
教へられた
通り、雑木を
束ねては運
び、運んでは
又束ねて、精
一ぱいに働いた。



しばらくの間めい／＼がこんな風に働いてゐると、谷向ふのくさむらの中から、けた／＼ましい羽ばたきの音を立てて、山鳥が一羽飛立つた。同時に獵れふ

銃の音が續けざまに二發聞えた。日は大分高くなつてさわやかにか／＼やき、高い／＼青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。
父は

「かうしてみんな手をそろへて働けば、來年の秋はもう眞白な蕎麥そばの花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。」

と楽しさうに言つた。

かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪

縁

の地面が新しく開かれた。方藏さんのひいてゐた
けやきの大木も、見事に根本から切倒された。

第九 陶工柿右衛門

窯場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下し
て、つかれた體を休めた。日はもう西にかたむいて
ゐる。ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりに
なつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかゞや
いてゐる。喜三右衛門は餘りの美しさにうつとり
と見とれてゐたが、やがて
「あゝ、きれいだ。あの色をどうかして出したいも

自

のだ。

とつぶやきな
がら、又窯場の
方へとつて返
した。日頃から
自然の色にあ
こがれてゐた彼は目のさめるやうな柿の色の美
しさに打たれて、もう立つても居ても居られなく
なつたのである。



喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。

困

しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色の美しさは出て来ない。毎日焼いてはくだし、焼いてはくだしして、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。

困難はそればかりで無かつた。研究の爲には、少からぬ費用もかゝる。工夫にばかり心をうばはれては、とかく家業もおろそかになる。一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。弟子たちも此の主人を見限つて、一人逃げ二人逃げ、今は手助する人さへも無くなつた。喜三右衛

罵 唯

門はそれでも研究を止めようとしなない。人は此の有様を見て、たはけとあざけり、氣ちがひと罵つたが、少しもとんぢやくしない。彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。

かうして五六年はたつた。或日の夕方、喜三右衛門はあわたゞしく窯場から走り出た。

「薪は無いか。薪は無いか。」

彼は氣がくるつた様にそこらをかけ廻つた。さうして手當り次第に、何でもひつつかんで行つては窯の中へ投込んだ。

離 雞

喜三右衛門は、血走つた目を見張つて、しばらく火の色を見つめてゐたが、やがて「よし」と叫んで火を止めた。

其の夜喜三右衛門は、窯の前を離れないで、もどかしさうに夜の明けるのを待つてゐた。一番雞の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。胸ををどらせながら、窯のまはりをぐるぐ廻つた。いよく夜が明けた。彼はふるふる足をふみしめて、窯をあけにかゝつた。朝日のさわやかな光が、木立をもれて、窯場にさし込んだ。喜三右衛門は、一つ

皿

尚

巧

又一つと、窯から皿を出してゐたが、不意に「これだ」と大聲をあげた。
「出来た」。

皿をさげ、喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。

柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。彼は此の後、尚研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで、世に柿右衛門風といはれる精巧な陶器を製作するに至つた。柿右衛門はい

とり我が國內において古今の名工とたゝへられてゐるばかりでなく、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

第十 銀行

「おとうさん、今度役場の隣にりつばな建物が出来ましたね。あれは何ですか。」

「あれは銀行だよ。今までは横町の小さい家だつたが、今度はあゝいふりつばなのを建てたのだ。」

「銀行といへば、おとうさんは何時かも銀行へ行つてお金を預けて來るとおつしやいましたね。銀行

預

はお金を預ける處ですか。」

「まあ、さうだね。」

「一體、なぜお金を預けるのですか。」

「お金といふものは、うちにしまつて置くものではない。うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。さうで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。」

「預けたお金は何時でも返してもらへますか。」

預

期 限

「銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。當座の方は何時でも引出すことが出来るが、定期の方は預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が来ないと引出すことが出来ない。」

「それでは當座預金の方が便利ですね。」

「便利だが、その代り利子が安い。定期の方には利子がずつと多く附く。だから當分使ふ見込のない、まとまつたお金は定期預金にした方がよいのだ。」
「一體、銀行は人からお金を預つてそれをどうする

拂(払)

のですか。大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。」

「世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。」
「成程、うまく出来たものですね。」

貸 差

第十一 傳書鳩

玉
羽毛

寶玉をありばめたやうなかはい、目、紅をさした
かと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包
まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものであ
る。此の愛らしい小鳥が、他の方法では全く通信が
出来なくなつた場合でも、いろ／＼の困難をか
して、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、
誰でも驚かない者はあるまい。

鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、
殊に一時は非常に盛に行はれたが、無線電信など
が發明せられて以來、自然輕んぜられるやうにな

證
飼
勵

普

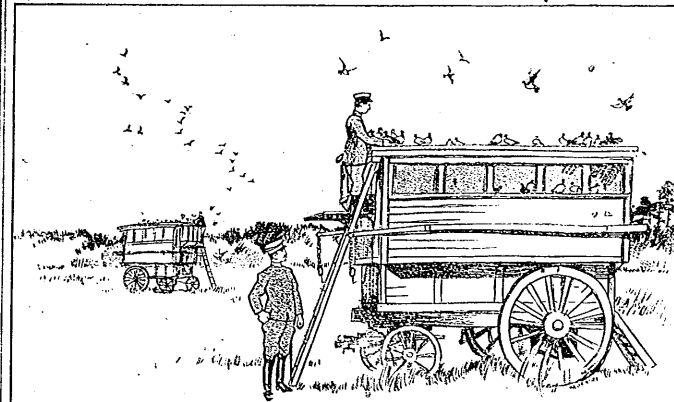
つた。ところが、先年の歐洲大戰で、やはり此のやさ
しい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證
明せられたので、今では各國共に盛に傳書鳩の改
良に力を用ひ、其の飼養を獎勵してゐる。

鳩は餘程遠い處で放しても、正しく方向を判定し
て、矢のやうに自分の巢に飛歸る。それ故鳩の體に
手紙を附けて放せば、容易に通信が出来るのであ
る。

普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から
他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。し

豫

かし此の外に、往復通信の方法もある。それは、豫め甲乙の二地をきめて置いて、一方を飼養所、一方を食事所とし、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、四五十



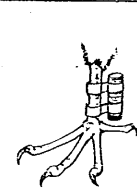
飛移其處覺

獲路

キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出来るし、飼養所を移動し、其處を見覺えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムかセロイドの細いくだを附け、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。傳書鳩を利用する場合はなかく多い。飛行機の不時着陸地點を知らせたり、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、登山者が路に

援

畫



迷つて危険におちいつた時救を求めたり、いろ／＼に利用する事が出来る。又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。殊に要塞が敵にかこまれて、無線電信機は破壊せられ、傳令使は途中で要撃せられ、全く方法の盡きた場合などには、此の勇ましい小傳令使にたよるより外はない。あゝ、あのかはいゝ鳩が、一度任務を命ぜられると、勇ましく高空に輪を畫がきながら、しかと方向を

的

僧 門

留守

見定め、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。

第十二 鉢の木

雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へとこへば、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、

「折あしく主人が留守でございますので。」

迎

とことわりぬ。されど婦人は、氣の毒と思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行きけり。

折から、たもとの雪を打拂ひくつ、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

「お、降つたはく。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」

感がいに打沈みてとぼくと歩を運ぶ。ふと我が妻を見つけて、

「此の大雪に、どうして出かけたのか。」

宿

泊

「旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

主人は急ぎて家に歸りぬ。

僧は改めて主人に一宿をこへり。されど主人は、

「御覽の通りの見苦しさ、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出来ません。此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。日の暮れない中に、一足も早くお出かけなさい。」

といふに、僧は返す言葉もなくして出行きぬ。

すごくと立去る僧の後影を見送りたる妻は、や

がて夫に向ひて、

「あゝ、おいたはしいお姿。とても明るいうちに山本まではお着きになれますまい。」

お泊め申してはいかゞでございませう。」

同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、

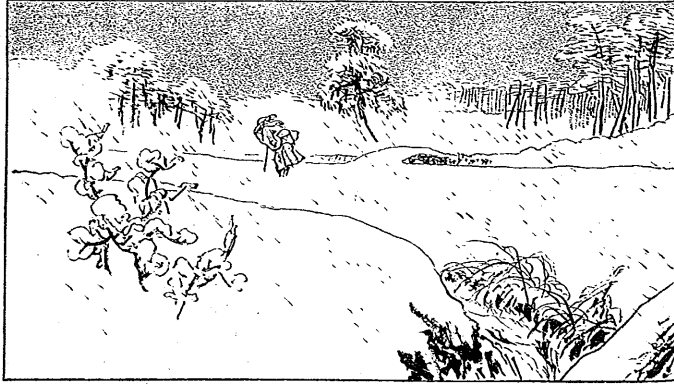
「ではお泊め申さう。此の大



失

雪、まだ遠くは行かれまい。主人は僧の後を追ひて外に出でぬ。

「なりく、旅のお方、おもとり下さい。お宿致しませう。主人は聲を限りに呼べど、はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞずみたる様は、古歌に



駒とめて袖打拂ふかげもなし、

佐野のわたりの雪の夕暮。

といへるにも似たりけり。

からうじて僧をともしひ歸れる主人は、物かげに妻を呼びて、

「お連れ申しはしたが、差上げる物はあらうか。粟飯ならございますが。」

主人はうちうなづきて出來り、僧に向ひて、

「お宿は致しても、さて何も差上げる物はござい
ません。ちやうど有合はせの粟の飯召上るなら

坐圍

と妻が申してをりますが、いかゞでございませう。」

「それはけつこう、頂きませう。
やがて運び來れる、食しき膳に向ひ、僧は喜びて箸
を取りぬ。」

三人はゐろりを圍みて坐せり。ゐろりの火は次第
におとろへ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが
如し。

「だんく、寒くなつて來たが、あやにく薪も盡き
てしまつた。」

梅

さうだく。あの鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。」

とて主人の持來れるは、秘藏ひかくの梅松櫻の鉢植なり。僧は驚きて、

「お志は有難いが、そんなりつばな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。」

「私はもと鉢の木がすきで、いろく集めた事もありましたが、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、大てい人にやつてしまひました。しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大

矢

切に残して置いたのでございますが、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しませう。」

主人は三本の鉢の木を切りてゐるりにたきぬ。僧は其の厚意を深く謝し、さて

「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」

「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

主人はけんそんして言はず。僧は重ねて

「お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。是非お明かし下さい。」

未 奪郷

長刀

「それ程おつしやるなら、恥かしながら申し上げませう。佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。」
 といひて目をふせしが、主人はやがて語氣を改めて、

「がやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に

空

暇

身を固め、さびたりとも長刀を持ち、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ參じ、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、これぞと思ふ敵と打合つて、あつばれてがらを立てるか。ごしかし此のまゝに日を送つては、唯空しくうゑ死する外はございません。

一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、兩眼に涙をたへて聞きゐたり。

翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でん

留

とす。始は身の上をつゝみ、貧の恥をつゝまんとし
て宿をことわりし常世も、一夜の物語にうちとけ
ては、名残なかく盡きず。今一日留り給へとす、
めて止まざりき。旅僧もまた主人夫婦の情心にし
みて、そゞろに別れがたき思あり。されどかくて何
時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。
降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふ
る、春とはなれり。頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙
汰俄に國々に傳はりぬ。常世は、時こそ來れと、やせ
馬にむちうつてはせつけたり。やがて命ありて御

沙汰

上

寒汝

前に召されぬ。諸國の大名小名きら星の如く並べ
る中に、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を
横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかし
こまれば、最明寺入道時頼はるかの上座より、
「それなるは佐野源左衛門常世か。これは何時ぞ
やの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。其の時の
言葉にたがはず、眞先かけて参つたは感心の至
り。さて一族どもに奪はれた佐野三十餘郷は、理
非明らかなるによつて汝に返しあたへる。又寒
夜に秘藏の鉢の木を切つてたいた志は、何より

授

もうれしく思ふぞ。其の返禮として加賀に梅田、
越中^{えちご}に櫻井、上野^{かみづの}に松井田合はせて三箇所の地
を汝に授ける。

時頼は尚一同に向ひて、

侍
訴訟
斷

「今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある
者は申し出るがよい。理非を正して裁斷致すて
あらう。」

一同謹んで承る中に、常世は有難き身にしみ喜に
みちて御前を退きけりとぞ。

第十三 京城の友から

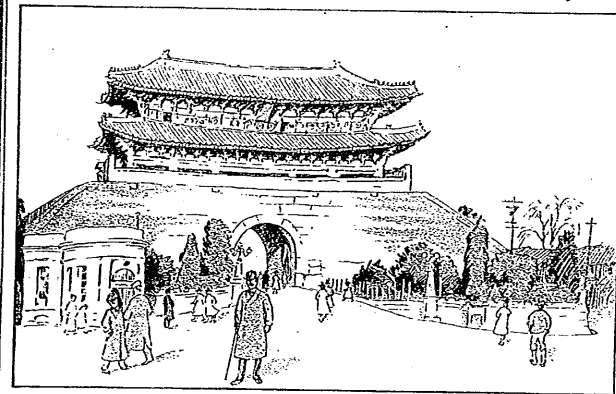
國十

京

街

しばらく御無沙汰致しました。皆様御か
はりはありませんか。こちらも一同無事
です。何時か御約束した通り、今日は當地
の様子を少しばかり申し上げます。
汽車で京城へ来る人は通常南大門驛で
下りるのです。此の停車場を出て大通を
東北に進むと、二町ばかりで大きな門の
前へ出ます。此の門が南大門です。京城の
市街はもと石でたゝんだ高い城壁で圍
まれ、その處々にかういふ門があつて、出

留



入口になつてゐたのださうです。今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、門も主なものは残つてゐます。南大門通から本町通鍾路通にかけての一带が、京城での一番にぎやかな處です。

天照大神

府

宮

南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大

構

館

煉瓦

展

な構がある。其の手前は一帯に朝鮮家屋で、其の又手前には朝鮮ホテル、朝鮮銀行、京城郵便局、天主教會堂などのりつばな洋館がそびえてゐる。すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。京城の西南部に龍山りゅうざんといふ處があります。龍山はもと漢江かんかうにのぞんだ小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、今で

編

は龍山も京城の中に編入されたのださうです。此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。

こちらへ來てもう三月餘りになります。がよくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。殊に秋晴の美しさはかくべつで、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたくてたまらないだらうと思ひました。此の頃は、大分寒くなつて、朝は攝氏零度セルシウス。

替則

以下十何度といふきびしき、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらゐの間暖さが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

お知らせしたい事はまだいろいろありますが、大分長くなりましたから、今日は

炭 降 圖

第十四 炭坑

水野竹次郎君

十二月十八日

原 安雄

此のくらゐにして置きます。どうか御両親様によろしく。おついでに野田君や山口君にもよろしく。

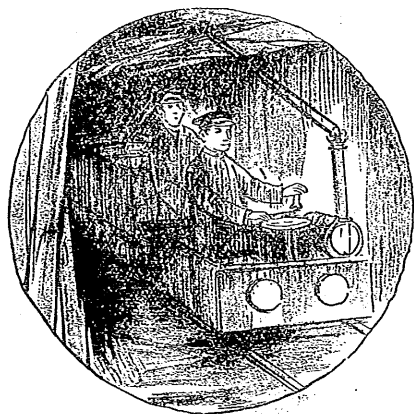
此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、案内の事務員と一所に昇降器に乗りました。合圖のかねが鳴るとすぐ動き出す。地下水のしづくが、四方か

往

ら雨のやうに落ちて来る。昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。安全燈の取手^{とって}を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。昇降器を下りて、あたりを見まはすと、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。室の

備



中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。これは炭坑内の地下水を坑外へ汲出す爲で、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

ポンプ室を出てから小道へはいりました。此處は電燈も無いので、眞暗です。安全燈をたよりに歩いて行くと、不意に足もとからねずみが一匹飛出し

ました。はつと思つて立止ると又一匹。事務員は平氣で、

「坑内にはねずみがたくさん居て困ります。と言つて笑ひました。」

其のうちに馬屋の前に出ました。二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

馬屋の前を通つてだんく奥深く進むといよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。つるはしの音

思

崩

がこつつりく聞える。暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。近づいて見ると、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。つるはしの先がきらりと光る。石炭ががさりと崩れる。又つるはしをふり上げる。石炭の壁は安全燈の光に照らされて、



採

黒光りに光つてゐます。採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをざるで運んで炭車に入れる。炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、電気機關車の通ふ道まで運んで行きます。

歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。『今から四百年許前の事ださうです。或日、此の附近の山へ薪をとりに来た百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。驚いて調べてみると、あたりは同じ

燃 姓

更

眞黒な岩ばかりでした。それから『燃える石』といふひやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。これがつまり此の炭坑の始ださうです。』

坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、日光の有難さをしみぐく感じると共に、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

第十五 輸出入

羊

我々が今日生活して行くには、我が國で出来る品物ばかりでは用が足りない。又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。米は我が國でずるぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、オーストラリアや南部アフリカなどから

重

輸入する。機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。

我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、國內で出来た物を外國へ輸出することもある。なか多い。輸出品の主な物は、生絲、綿織物、綿絲羽、重銅、茶、マツチなどで、輸出先はアメリカ合衆國、支那、イギリス、フランス等である。

又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外

印 豚 額

國へ輸出する事も少くない。綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、又支那印度其の他の東洋諸國へ輸出される。支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例である。最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

登

第十六 登校の道

冬の朝日のさす軒下に、
俵あむ手のいそがしげなる
父と母とに暇を告げて、
勇みて出づる我が家の門。

こずゑ明るき林を行けば、
やぶかうじの實木の根に赤く、
霜柱たつやぶかげの路、
ふめばさくく銀みだる。



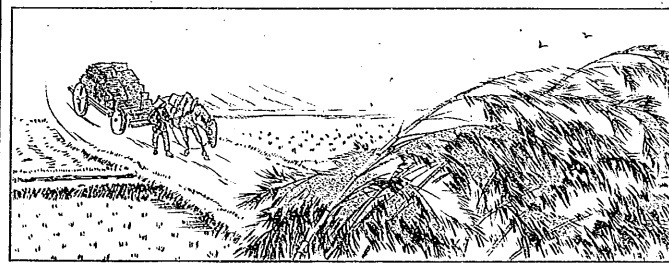
銀

整

耕地整理のあとうつくしく、
並ぶ田の面に氷きらめき、
新道づたひ車重げに
ひき来る馬のつく息白し。

交

村の社の掃除や終へし、
はうき手にく、此方をさして
語りつゝ来る若き人々、
今朝とく出でし兄も交れり。



第十七 言ひにくい言葉

ナマムギナガゴメナガタマゴ。
ナマムギナマモメナマタマゴ。
幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は
生麥生米生卵。

と、早口にすらく言へるやうになつた。太郎は得意になつて、

「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」

といふと、父はにこく笑ひながら、

「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてある。」

「何といふ言葉ですか。」

「はい。といふ言葉と、いゝえ。といふ言葉だ。」

「はい。いゝえ。大變やさしい言葉ではありませんか。どうしてそんなに言ひにくいのです。」

父は

「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」

翌日太郎が友だちの正雄、良一と三人連で、學校か

ら歸る時の事であつた。本道は遠いから近道を通らう。と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。其の近道といふのは田のあぜ道で、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。太郎は前から父に、あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。と固く禁ぜられてゐたのであるが、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、何れもぬれねずみのやうになつて家に歸つた。

父は

「お前はとうしたのだ。かねてあぶないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。」

とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。父は

「なぜ其の時いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。」ときつぱりことわらなかつたのか。

僕は再三ことわつたのです。すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。僕は残

念でたまらなくなつたので、何此のくらゐの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。

「成程弱蟲だ。人の言ふことに對していゝえ。」と言切るには、ほんたうの勇氣がいる。お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程いゝえ。といふ言葉は言ひにくいのだ。

それから又晝間私が聞いた時、なぜすなほにはい。』といはなかつたのだ。

「僕何だかきまりが悪くつて、さう言へなかつたのです。」

「それ御らんはい。も言ひにくい言葉では無いか。太郎はつくぐと自分の悪かつた事を後悔すると共に、はい。といゝえ。の言ひにくいわけをさとする事が出来た。」

第十八 文天祥

支那の宋朝そうの末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地ををかしゝかば、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。

亡

悔

虎羊

敗兄

以

宋の臣文天祥もんしょう大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、羊の虎に向ふが如し。危し。と。天祥きかずしていはく、我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。と。出て元軍に當る。

然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝、皇后も遂に敵手に落ちぬ。こゝにおいて皇兄位をつぐ。文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

捕

たま／＼元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

降

時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく、書をしたゝめて張世傑を招け。と。天祥固くこばみていはく、我國を救ふことあたはず。いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。と。張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、張弘範、文天祥に説きていはく、宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今よ

富

病効治

り心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。と。天祥きかず。或人又なじりていはく、汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。と。天祥いはく、父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。と。遂に獄に投ぜらる。元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。天祥いはく、我は宋の臣なり。

從

いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死をたまへ。と。帝其の志の動がすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としていはく、臣が事終る。とうやくしく南宋の方を拜して死す。

元帝歎じていはく、文天祥は眞の男子なり。と。

第十九 温室の中

寒い北風に吹かれながら、冬枯の小道を通つて来て、一足温室の中にはいると、全く別の世界に來たやうな心持がする。とりぐゝの花の色、むせ返るや

香

うな強い香ばうつと身に感じる暖さ、ガラス屋根を通して來るやはらかい日の光、まるで春の國に居るやうだ。先に立つたにいさんが、

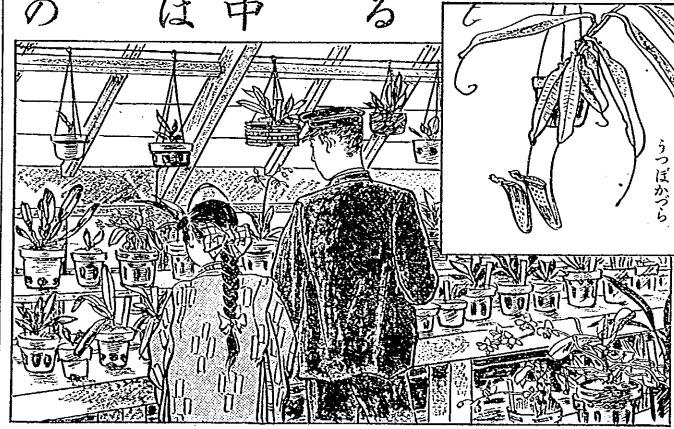
「あゝ、咲いてゐる、くゝみよ子、ずるぶん珍しい花があるだらう。此處は重に蘭らんの類を集めてある處だ。熱帶地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。」

と、いろく説明して下さる。たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲い

薄

てゐる薄紅色の花である。それから少し行くと、うつぼかづらといふものがある。葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。

「此の袋で蟲をとるのだ。中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。」とおつしやるから、そつとの



ぞいて見ると、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。ほんたうに不思議な草だ。さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。

絹 群

といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もある。中には、赤や黄や青や紫のまだらの美しいものもある。中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出てゐるものもある。建物はこの處から右に折れる。次の室には大きい熱

管 暖

帶植物類が並んでゐる。椰子バナ、コーヒー！ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。にいさんは

「此の後にかまがある。其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。」

と教へて下さつた。

其處から又右に折れると、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。にはひのよいのや、色の美しいのや、形のかはいらしいのや、どれを

髪

見てもどれを見ても、一枝髪にさしてみたい。にいさんも足を止めて、

「どうだ、美しいだらう。此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。」

とお笑ひになつた。外はさつきよりも一そう風が強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる鳥の姿も、見るから寒さうだ。

第二十 手紙

一

障

御手紙有難く拜見致し候。寒さきびしき折から皆様には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。さて御父上様の御葉書ならびに御前様の御手紙により、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。男ばかりの御兄弟の中に、此の

度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。私とてもかはゆらしきめひの生れ候と聞きては、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。御名は何と付けられ候や、これも早く承りたく、御知らせ待ち上げ候。御母上様はまだ御やすみにて、御前様には御家事御手つだひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、何分百

縫 粗 任

里の山川をへだてたる事とて、それも心に任せず、甚だ残念に存じ居り候。今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。皆様へよろしく御傳へ下されたく願ひ上げ候。かしこ。

五月五日

叔母より

さち子どの

二

悲 夢

承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、御養生のかひもなく、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。大兄をはじめ皆様方の御悲歎、如何ばかりかと御察し申し上げ候。當地に御住まひの頃度、度參上致し、大兄と共にいろく御話を承り候事など、今更のやうに思ひ出され

悔 好 佛

候。兩親も非常に驚き居り、あつく御悔申し上げ候やうにと申し出て候。尚御生前御好物なりしやうかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下されたく候。先は右とりあへず御悔申し上げ候。

二月六日

小林梅吉

大森 茂様

第二十一 日光山

ふたら
二荒の山もと

木深き處、

振巧丹

美術

だいや
大谷の奔流

岩打つほとり、

金銀珠玉を

ちりばめなして、

ひねもす見れども

あかざる宮居。

浮きぼり毛ぼりの

柱にけたに、

振るひしのみのて

巧をきはめ、

丹青まばゆき

格天井に、

心をこめたる

繪筆ぞにほふ。

美術の光の

かゞやく此の地、

日本

山皆緑に

水また清く、

樂園日本の

たへなる花と、

とつ國人さへ

めづるもうべぞ。

第二十二 捕鯨船

昨夜の風雨は名残なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。マストの上の見張人が不意に

「鯨、鯨。」

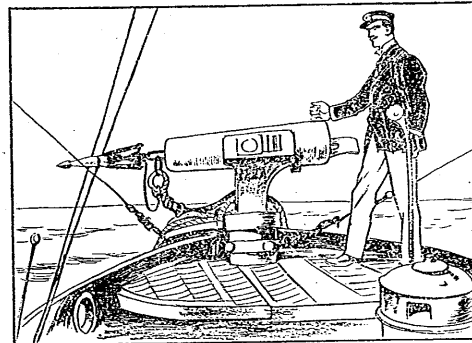
と聲高く叫んで、北の方を指さした。

捕鯨

裂

甲板に立つてゐた船長を始め十人許の乗組員は、ひとしく目を其の方向に向けた。はるかあなたに白い水煙が見える。砲手の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じた。砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。右に左に鯨を追いつつ四五十メートルまで近づいた時、ねらひを定めて、ずどんと一發、破裂矢をしかけたもりを打つ。もうくと立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

歡呼



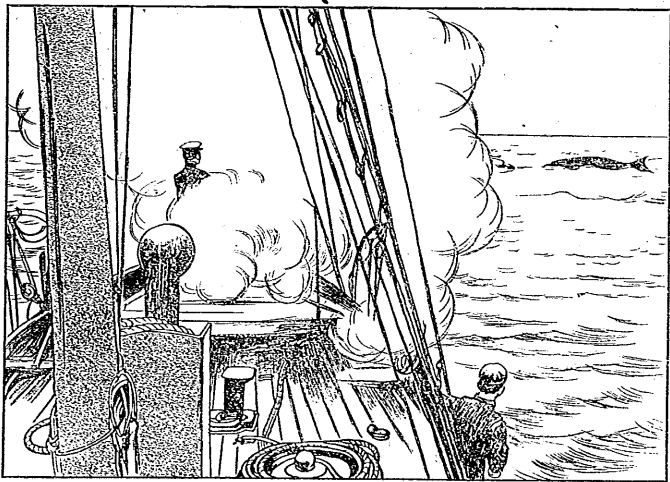
「命中、々々。」
一同は歡呼の聲をあげた。もりが體內深くくひ込んで、破裂矢が見事に破裂したのであらう。もりにつけた長い綱はぐんぐん引張られて、三百メートル許もくり出された。

彼方

やがて鯨は再びはるか彼方に浮上つた。今まで勢よく引出されてゐた綱もやゝゆるんで來た。綱を次第々々にくりもどすと、鯨は刻一刻船に近よつ

巻

て來る。しかしまだなかなか勢が強いので、綱を巻いてはのばし、のばしては巻いて、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。其の時、二番もりが打出された。二十メートル



紅

ルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな
體を水面に横たへる。あたりには流れ出る血に、紅
の波がたゞよふ。

「萬歳、々々。」

船員は手早く鯨の尾をくさりて船ばたにつない
で、威勢よく根據地^{きよ}に引上げる。

第二十三 太宰府まうで

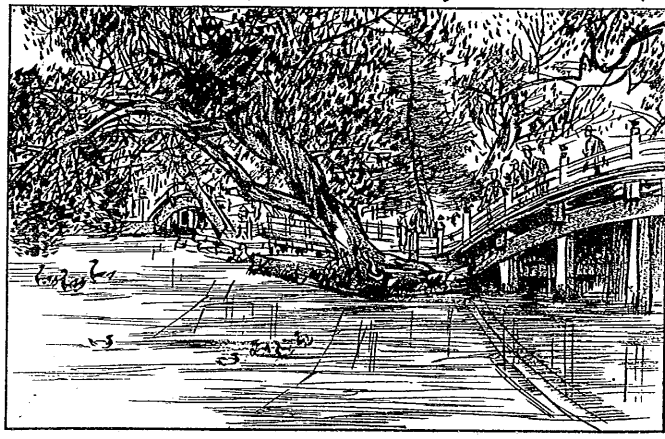
汽車で二日市驛に着いたのは午前八時、驛前で
太宰府行^{だざいふ}の輕便鐵道に乗つた。まだ芽の出ないは
ぜの木の間を通り、霜の眞白に置いた田の中を走

輕

經

る。十五分許で汽車は太宰
府町に着いた。

太宰府町は太宰府神社の
ある處である。青銅の大鳥
居をくゞつて進むと、沿道
の家は大てい天満宮にち
なんだ物を賣つてゐる。間
もなく神社の廣い境内に
はいつた。何百年も經たて
あらうと思はれる樟の大



馬 拜 鏡 墓 梅 紅

木が茂り合つてゐる。池にかけてある二つの太鼓橋を渡り、繪馬堂の前を通つて樓門をくぐると、本殿の前に出る。うやくしく拜んできて頭を上げると、神前の大きな神鏡が、きらりとかがやいてゐて神々しい。此の神社は菅公の御墓所に建てたものだといひ、一層感を深くした。社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。掛茶屋に休んで名物

尋

跡

の餅を食べてゐると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。歸りは二日市まで歩くことにした。地圖を便りにして進んで行くと、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、霜よけのわらの間から黄色い夏みかんがちらちら見えてゐるのも珍しい。途中、太宰府といふ昔の役所の跡などを見て、榎寺といふ處に立寄つた。此處は菅公配所の跡である。低いじめくした松林の中に小さな社がある。

詩

公は此處にうつされてから一步も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。宮中の御宴ぎよえんの事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。榎寺を出て二日市の停車場へ急いだ。冬の日はまだ暮れかゝつてゐる。あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。停車場に着いた時は午後の六時を過ぎてゐた。



紙

歴

第二十四 たしかな保證

外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。申し込んで來た者は五十人許もあつて、中には知名の人の紹介状せうかいじょうを持つて來た者や、りつぱな學歴のある者もあつたのに、主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。主人は答へて、

「あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこ

りを拂ひ、はいると静かに戸をしめました。きれ
いずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分り
ました。談話の最中に一人の老人がはいつて來
ましたが、それを見るとすぐに立つて、椅子いすをゆ
づりました。人に親切なことはこれでも知れる
と思ひました。あいさつをしてもていねいで、少
しも生意氣な風が無く、何を聞いても、一々明白
に答へて、しかもよけいなことは言ひません。は
きはきしてゐて、禮儀ぎをわきまへてゐることも、
それですつかり分りました。

床

私はわざと一さつの書物を床の上に投げて置
きました。外の者は少しも氣がつかないらしか
つたが、あの青年ははいるとすぐに書物を取上
げて、テーブルの上に置きました。それで注意深
い男だといふことを知りました。
着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着て、齒は
もよくみがいてゐました。又字を書く時に指先
を見ると、爪はみじかく切つてゐました。外の者
は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒にな
つてゐる者が多うございました。

かういふ點から、いろくの美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。りつばな人の紹介状よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。』

といつた。

第二十五 平和なる村

我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。全村農業を以て生計を立つ。村の財産家にて事業に熱心なる人、みづから先んじて耕作、養蠶、養雞、養魚等の模範をしめししを以て、近年は作物も改良せられ、桑

蠶模範

戸

益

幸

勤績

を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村雞を飼はざる家なし。又池沼を利用して鯉^{かな}鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を楽しめり。

役場と學校とは村の中央にあり。村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、常に力を一村の幸福の爲に盡くすが故に、深く村民に敬愛せられて、幾度の改選にも重ねて選舉せられ、既に二十餘年勤績せり。校長も着實温厚なる人にして、生徒を

和 基 營 林 課 專

愛すること子の如く、生徒も校長をしたふこと父母の如し。其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、生徒は皆よく之になつきて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。
青年團の事業の一として、杉檜いとしの植林を營めり。其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。
萬事此の有様なれば、一村は誠に平和にして、年を

飾 増 榮

追うて其の繁榮を増すばかりなり。

第二十六 進水式

今日を晴と満艦飾をほどこされたる三萬四千噸の大戦艦陸奥むつは、海を後にして悠然と横たはれり。果もなくすみ渡りたる大空はなやかに流るゝ日の光場に満ちたる十幾萬の拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。

讀 臨 奏 樂

折しも起る君が代の奏樂。皇后陛下の臨御と共に、式は始りぬ。海軍大臣の命名書朗讀、工廠長の進水

揮 作

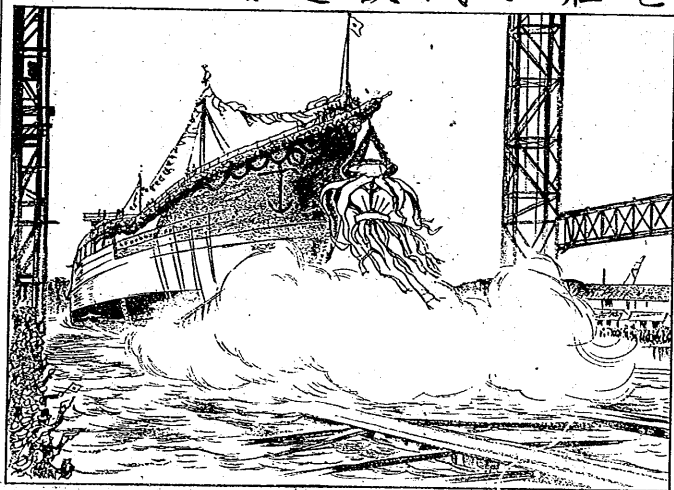
命令、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

拜觀者の目は、一せいに艦にそゝがれぬ。一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸尺間と音もなくすべり出づ。艦首につるしたるくす玉はつとわれて、紅白の紙片花ふぶきの如くに散る中を、羽音高く舞上る數羽の鳩。

片

秒

拍手かつさい、天地をとどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。見る／＼艦は速力を増して、白波高く海にをどり入る。
あゝ、海の戰士の勇ましく誕生。



賤

舉

第二十七 兒島高德

元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隠岐にうつし奉る。京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、警固の武士もさすがによろひの袖をしぼりけり。

此の頃、備前に兒島高德といふ武士あり。主上さきに笠置におはせし時、早くも義兵を擧げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。然るに今主上隠岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへ

遅

るやう、義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。と。心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、けはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ふ。と人の言へば、衆皆力



を失ひて散りく
になりぬ。

高德せめては此の
所存を君に知らせ
奉らばやとて、夜に

句

まぎれて行在所の御庭にしのび入り、大いなる櫻
の幹をけつりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

天、勾踐を空しうするなかれ。

時、范蠡無きにしもあらず。

翌朝警固の武士ども之を見つけて、讀みかねて上

顔笑越敗

計

故

聞に達したり。主上は詩の心を御さとりありて、天
顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

昔支那に呉越とて相隣れる二國ありき。年久しく
相争ひて互に勝敗ありしが、勾踐越の王となるに
及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に
捕へられぬ。後からうじて歸國することを得しが、
勾踐此のうらみ忘れがたく、范蠡といふ忠臣の助
を得て報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を
亡しぬ。

高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王

K130.8-3-10

第五七 兒島高德

百三十四

の兵を挙げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞
え上げたるなり。

終

國十

大正十一年七月一日 翻刻印刷
大正十一年七月廿三日 翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者

原 亮 一 郎

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

大正十一年七月三日
文部省檢査濟

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

尋常小學國語讀本卷十

大正十一年度 臨時定價 金貳拾錢

乙